

看護職部門

白衣を脱ぐ日に

やぎ ふさこ
【八木 房子・愛媛県】



内館牧子賞

白衣に袖を通す。心の中で何かが静かにざわめいている。今日が看護師最後の日。

見慣れた病室、ナースステーション、目に入る一つ一つが真新しく映る。明日から見ることのないこの光景。私は35年間、数え切れない患者に出会い、数え切れない死を見つめてきた。「看護」というものに少しでも近づくことができたのだろうか…。白衣を脱ぐその日になって、自分が歩いた看護の色がぼんやりと浮かぶ。皮肉なものだ。白衣に包まれていた時に見ようとしなかった色を思い浮かべるなんて。

一步一步、廊下を歩く。ふと立ち止まった病室の前に、車いすの彼女がほほ笑んでいる。彼女は末期がんの若い患者だった。激痛と吐き気が彼女を容赦なく襲っていた。私にできることは、指示された鎮痛剤を投与することだった。ある日のこと、口数の少ない彼女が、
「看護師さん、私、座りたい」。

氷のような目で私に訴えた。心が震えた。どうしても彼女を車いすに乗せたい、という気持ちが揺るぎないものになった。必死の説得で医師から許可をもらった。なぜ、私はこんな思いになったのか。それは、看護師として何もできないつらさと、もしかして、がんになるのは彼女ではなく私だったのかもしれない、という人生の宿命を感じたからだ。

彼女を車いすに乗せた。力のない手を顔まで上げ、ピースしてほほ笑んでくれた。彼女の目にかげろうのような光を見た。希望を失いかけた時でも、人は時としてほほ笑むことができるのだ。うれしかった。目が潤んだ。つらかった。悲しかった。彼女は2日後、静かに目を閉じた。

私が白衣を脱ぐ日に、30年前に逝った彼女が、あの時のほほ笑みで見送ってくれた。

彼女が私の中に残していったのは、死ではなく確かな看護だと私は信じたい。

ああ、私、看護師だったんだ。